

個人情報不足して再び読む歌集一人の顔が入れ替わりたり
細溝洋子

作者や登場人物を知って読むのと知らないで読むのでは、歌集はちがって読める、というのである。おもしろいところに取材したと思う。写真発明以前と以後では小説や詩の読み方が変わったという近年の研究がある。一人称小説や一人称詩にかぎらず、読者の心は写真の顔のイメージに支配されるといっているのである。そんな研究があったことを思い出した。

父をらぬ父の家にて虫の音を聞きつつ過ぐす子のを
らぬわれ
高山邦男

人生を直接うたつてしみじみとした感慨をおぼえさせられる一首。父の人生、自分の人生を重ね合わせることで、あったかもしれぬ可能性としての自身の人生が浮かびあがる。

脚を折り甲羅を剥がし肅々と蟹を食べいる正しき家
族
谷ちえみ

上句の乱暴そうな動作表現と、「肅々と……正しき家族」の対照が、独特の良質なユーモアを生んでいる。一読、秀歌として記憶にきざんだ。

国内に二台と言われる大クレーン小佐野に来たりて
橋桁を吊る
小笠原政雄

橋桁を吊り上げる巨大クレーン。好奇心に満ちて凝視している人々が目にみえるようだ。もちろんその中に作者もいる。小佐野という地名と数詞が、作品の輪郭を鮮明にしている。

短歌の現在

No.442 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

石垣に群れ咲く野菊吹く風に歌口ずさむ亡き妹のこ
糸
松田英美

上句の石垣の風景、昭和半ば以前のような雰囲気があるので、作者の少女時代の思い出のように読める。なつかしさをかもしだしているのは、たぶん「野菊」である。かつて「野菊」に人氣の集まった時代があった。

子をのせて自転車こぎゆく母のあり父のありその前
屈みよし
鈴木香代子

場面のない歌は、詩ではなくアフォーリズムになりがちだが、この歌、「……父のあり」までが眼前の風景のようにも読めるので、結句のイメージがかろうじて読者の心に浮かびあがる。そう思つて読み返すと、高山作とちがった意味で、人生を考えさせる歌に読める。

波の音が変わり湿つた朝が来る順に消えゆく漁船の
灯り
曲洲江里子

ベトナム旅行に取材した八首中の作。南国の海独特の朝の空気を表現した上句に感心した。上句を生かすために下句の軽い描写がうまく働いている。

鷺居らぬ鷺沼駅過ぎあざみ無きあざみ野駅にてバス
モをかざす
堀 亜紀

道行き文ふうな軽い乗りで、東京の東急田園都市線の駅名を話題に、意味を消されて単なる記号となつてしまった固有名詞をきらりと示した技巧。ちなみに、ここに出てくる二つの駅は、わが家のある二子玉川駅から十余分のところにある。

独房の生身の我をぐいぐいと歌の〈我〉へと引き寄